只見の生き物たちがもたらす森の恵み

「国際生物多様性年」記念シンポジウム

▲ 調査研究員の皆さんによるディスカッション

２０１０年は、国連の定める「国際生物多様性年」の年で、10月には、「国際生物多様性条約締約国会議（ＣＯＰ10・コップテン）」という国際会議が名古屋市で行われます。これを記念したシンポジウムが1月23日に季の郷・湯ら里で行われ、町民の方々はじめ関係者、約２００人が参加しました。

このシンポジウムは、茨城県つくば市に拠点をおく独立行政法人森林総合研究所がプロジェクトチームを編制し平成20年度より3ヵ年計画で只見の自然を調査研究している成果について中間報告するものです。只見町は、国内最大級と言われるブナ天然林をもち、絶滅危惧種や天然記念物に指定されているカモシカ、イヌワシ、ユビソヤナギなどが数多く生息しています。この豊かな自然環境が人びとの生活やレクリエーションなどに密接に関係し、自然の恩恵を受けながら生活している町であることなど、プロジェクトの研究目的に向いていることから調査地として選択されました。実際の調査活動は黒谷入地区や布沢地区などの山林や渓流、また町民アンケートなどで綿密に行われ、森の恵みと人びととのつながりに関する貴重なデータが集積されました。

シンポジウムでは、吉田謙太郎長崎大学環境科学部教授による基調講演が「森の恵みと生態系サービス」と題し行われ、森林の生物多様性と生態系サービスや町民アンケート調査と全国インターネット調査による森林生態系の経済評価などについて講話されました。講演で吉田教授は「このシンポジウムで豊かな生物多様性をはぐくむ地域（只見町）から、まずは情報を発信したい」と考えを述べました。

続いての調査報告では、チームメンバーの方々から、約2年間に渡る調査研究の成果を写真なども紹介され、分かりやすく説明されました。釣りや山菜・キノコ採りなどを通じて、森林の生物多様性が人びとの暮らしにどのような恵みをもたらしているのかや、里山としての森林利用のあり方を探求することなどにより、只見の自然の貴重性や重要性を検証、認識する報告となりました。

最後に「只見の生き物たちがもたらす森の恵み」について調査研究員の皆さんによるディスカッションが行われ閉会しました。

平成22年度で終了する調査研究で得られる只見町の情報やデータは、今後、生物と自然環境にかかわる様々な研究分野で先進的なテキストとなることでしょう。

生物多様性ってなに？

生物多様性は、すべての生物の間に違いがあることを意味し、生態系の多様性と種の多様性、遺伝子の多様性に大きく分けられます。生態系は、森林から海洋、砂漠、都市公園など様々です。また、地球上には大型ほ乳類から微生物にいたる３千万種を超える生物種が存在すると推定されています。そして、同じ種であっても遺伝子の違いがある多様な個体が存在することにより、病気の蔓延や絶滅の危険性が回避されることも知られています。

只見の自然はなぜ貴重か

～調査報告要旨より～

杉村 乾氏（森林総研・国際連携推進拠点主任研究員）

生態系サービスとは

私たちの生活は多様な生物からなる生態系の働きの上に成り立ち、その恩恵は「生態系サービス」と呼ばれています。これまで生物多様性は多くの場合、絶滅危惧種の保護という目標が主であったが、最近では生態系サービスに対する関心が高まっています。森林の生態系サービスとしては、供給サービス（木材、食材としての山菜やきのこ、薬草、さまざまな原料などの供給）、調整サービス（森林に生息する昆虫等による花粉媒介、多様な種の存在によって特定の害虫の大発生が抑えられるような働きなど）、文化的サービス（釣りや散策などの楽しみや静養、伝統文化・工芸などへの寄与、希少な生態系・動植物・遺伝的特徴などに対する価値観など）、基盤サービス（これらのサービスを支える生物の営み、たとえば光合成による有機物や酸素の生成、栄養循環、土壌形成など）が含まれます。

かつては日本中のいたるところで、これらすべての森林生態系サービスが十分に活用されていたと言えるでしょう。木の材がさまざまな家具、道具、食器などや燃料、実や葉などが食物、薬、染料、肥料などに利用されてきました。しかし、人と森の関わりが薄れつつある現代、天然林がもたらす供給サービスは人々の生活から離れていきました。もう一つの大きな変化は、生態系がもたらす市場経済的な価値が重視されたことです。その結果、ゴルフ場やスキー場などの商業的なレジャー施設の建設、それ以外の地域では木材自給率を最大限に高めるための人工林化が優先されました。

只見の特徴

巨大なレジャー施設や大規模な人工林化に適さなかった只見町には天然林が広く残され、日常生活の中で豊かな森林生態系サービスの恩恵を受け続けている数少ない地域の一つです。大規模化による効率アップに対し、スモール・イズ・ビューティフル（小さいことは美しい）という考えがあります。経済的に見て、小規模なほうが効率よいことが多いという元々の意味ですが、環境にもよいのは明らかです。もう一つ、大規模なバイオスフェア（生物圏）に生きる人々と小規模なエコシステム（生態系）で自給自足に重きを置いて生活する人々という区分があります。これまで人類はいずれも前者を幸せへの道標として目指してきました。しかし、南会津の特徴は「スモール・イズ・ビューティフル」と「エコシステムに生きる」の方に近く、環境の時代と言われる現代、目指す方向はこちらではないかと思います。

その根拠としては、①山菜やキノコの採取、渓流釣り、狩猟などがさかんである、②農業が小規模で森林性昆虫への依存度が高い、③レクリエーション利用としては小規模な森林浴などに適している、④カモシカ、ヤマドリなど日本固有種が多く生息するが、特徴としては希少種が多いこと、などである。

このプロジェクトでは只見町を最重要地域のひとつと位置付け、天然林が生態系サービスの維持活用に大きな貢献をしていること、小規模な伐採などが古くから行われてきた森林への働きかけが無くなってきたことの影響、地域住民が主体となって利用と資源の保護を図ってきた仕組みの重要性などを明らかにすることを目標に、調査を進めています。また、欧米では森林を利用する地域と原生的な状態で守る地域との間に明確な線引きをしようとする傾向がありますが、利用と保護が混然となりながらも、生態系サービスは持続的に活用されてきたこともアピールしたいと考えています。